



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2021年9月14日発行 第41号

9月の初めは、例年なら残暑が続くのが通例ですが、昨今の温暖化の傾向でしょうか、一気に秋が深まってきているように感じます。コロナ感染症も全国的には増加傾向にあり、緊急事態宣言が発せられている都道府県が多くあり、一日も早く沈静化が進むことを祈るばかりです。本アカデミーでもコロナ感染症対策として、講座時間の短縮を実施しています。さらに、手指の消毒や換気、マスクの徹底など感染症対策の基本を徹底していきたいと思っています。具体的な防止対策については、本アカデミーの「新型コロナウイルスによる感染症防止対策の指針」を参照していただければ幸いです。

◎ LPレコード音楽サロンが順調！

8月26日（木）に行われた「第2回 LPレコード音楽サロン2021」が初参加（4名）の皆様を含め参加者20名と関係者6名、総勢26名で盛況裡に開催されました。



今回のテーマは、「楽器革命～ピアニスト・ベートーヴェンの神髄」とし、ピアノ協奏曲をメインに鑑賞しました。後半は、本アカデミーの別科（オーケストラ・レパートリー）受講者でもある“牛尾尚義”氏によるミニ講座を開催しました。

プログラムの最初は、「ピアノ協奏曲第5番変ホ長調」《皇帝》を“ウィルヘルム・ケンブ”氏による独奏にフェルディナンド・ライトナー指揮でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏を鑑賞しました。演奏者の選曲にあたっては、本アカデミー所蔵の3枚と個人所有（副学長）の2枚のLPレコードを様々な観点から聴き比べ、最終的には芸術監督並びに学長、主任教授の皆さんのご意見を伺い決定いたしました。同じ曲であっても演奏者が変わればテンポ感や表現・表情が違い、楽しみながら聴き比べが出来たことにクラシック音楽の神髄を究めるようでした。

ミニ講座では、「アナログとデジタルの違い」についての解説の後、実際に音源を通して聴き比べを体感しました。講師の牛尾氏は、かつてレコード会社での勤務経験があり、その専門性を生かされ、レコードの製作過程の様子を詳しく解説されていました。レコードの製作過程で生まれるラッカー盤も所持されており、めったに聴けないレコード盤を皆さんが興味深く鑑賞されている姿が印象的でした。

今回もオーディオ機器は、「オーディオショップ・フクダ」様（松江市）のご協力を得、高級感あふれる音源により、家庭では味わえない満足感が得られたのではないかと自負しているところです。また、今回初めてオーディオ専門職員の方が立ち合ってください、機器操作から終演後のオーディオに関する質問まで丁寧に対応して下さったことは、開催者としてとても心強く感じました。

今回の音楽サロンでも、アンケートを実施しましたので、一部を紹介します。

裏面へ

Q1：本音楽サロンへの感想など

《良かったところ》

◆レコードの製作やCDとの違いなど、知らないことを学びました。また、貴重なレコードを聴かせていただき、大変興味深かったです。

◆会場のホール感など、家庭ではとても聴くことが出来ず、それだけでも良い企画。

◆前回のサロンでいただいたコピーの中で、ベートーヴェンのオススメ楽曲がありました。大変興味深く、また、参考になりました。

◆デジタルとアナログの聴き比べは面白かったです。アナログはやはりホールで聴いている感覚に近いと思いました。

◆レコードとCDの違い、初めて聴けた…。特にラッカー盤は珍しく興味深かった。

《気になるところ・改善してほしいところ》

◆レジメの大きさは揃えた方が良い。◆会場の換気。

◆レコードのノイズが気になりました。

Q2 年代：80歳代1人、70歳代6人、60歳代9人、50歳代2人、無回答2人

Q3 回数：初参加4人、2回目9人、3回目5人、無回答2人

Q4 地域：出雲市内18人、無回答2人

Q5 評価：とても良かった8人、良かった6人、まあまあ2人、無回答2人

次回は、ベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」をメイン曲に、10月28日（木）開催予定です。中井芸術監督によるミニ講座も予定していますので、クラシックファンの方、オーディオ機器に興味のある方、ご来場をお持ちしております。詳細は広報「いずも」10月号及び出雲芸術アカデミーホームページをご覧ください。

◎ パラリンピックを考える！

パラリンピック東京大会2020がオリンピックに続いて開催されました。アスリートの皆さんが、ハンディキャップを乗り越えて各競技に挑戦する姿は、たくさんの感動を呼びと共に、いろいろなことを考えさせられるきっかけとなりました。まず、「障がい者」という呼び方が気になりました。障がい者の反対語は「健常者」でしょうか…？ では、その健常者は何をもってそう言うのか疑問に思い始めました。自分は、視力が弱く（近眼）眼鏡をかけないと生活できません…。健常者とはいえなくなります。そう考えていくと健常者という人はほとんどいないのではと推察されます。何かしら体調不良やハンディを抱えながら生活しているのが現状ではないでしょうか…。そのようなことから、パラリンピックをTV視聴していると、オリンピックと区別する必要があるのか考えるようになりました。パラリンピックの選手の皆さんは、「苦手」な部分をどう克服するか、オリンピックの選手の皆さんは、「得意」な部分をどう生かすことが出来るのかは、お互いが「支え」、「支えられる」関係で共生されることが理想郷に思えます。障がいという言葉も不自由な社会インフラもすべて人間社会が作り出したものなので、意識改革すればすぐにでも改善していくことが出来る気がします。今回のパラリンピックに触れ、区別する必要のない共生社会を一人一人が考えなければならないこととして受け止めました。

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】